

「国際化」を目指した英語コミュニケーションの意義

— 4技能から2能力への新たな統合学習・指導による英語教育学的考察 —

大山 健 一*

キーワード：英語コミュニケーション、英語4技能、英語2能力、リメディアル教育、英語教育学

1. 目的

本論文では、如何にして英語の新たな統合学習・指導が必要となるのかを提唱することが目的である。「国際化」(Internationalization)を目指した英語コミュニケーションにあたって、高等教育における大学英語の基礎にこそ、現代社会に必要な英語を身に付ける基幹が存在していると言っても過言ではない。しかしながら、リメディアル教育では、英語4技能(リーディング・リスニング・ライティング・スピーキング)の中で1つずつを取り扱うことが多い。その理由として考えられることは、教師自身の専門性に関係しているためであろう。たとえ4技能に結び付けられた指導になっていたとしても、英語2能力(コンプリヘンション・コミュニケーション)にまで関連付けられてはいない。よって、英語教育学的需要を意識した場合に、母語話者の直観性(Intuition)を基にし、どのようにして4技能から2能力への指導アプローチを用いるのかを知る必要性がある。文学系であろうとも語学系であろうとも、教師側の専門性を意識しないものであり、「国際化」を目指した英語コミュニケーションの意義を意識しつつ、授業展開をすることが責務であると考えられることを提唱する。

2. 英語4技能

英語の4技能という場合、リーディング(Reading)・リスニング(Listening)・ライティング(Writing)・スピーキング(Speaking)を指す。リーディングでは、正確に読むための精読や時間内に読むための速読、そのために必要な単語力や文法知識が多く混在している。スキミング(Skimming)やスキヤニング(Scanning)、ノートテイキング(Note-taking)やパラフレーズング(Paraphrasing)などといった方法で英文を理解するのがリーディング技能である。

リスニングでは、音を聞いて穴埋めをする方法や聞いた音を全て書き写す方法など、単語だけなのか、句や文までなのかと様々である。リピート(Repeating)やディクテーション(Dictation)などといった方法や、リーディングと同様に、ノートテイキングやパラフレーズングなどといった方法で英文を理解するのがリスニング技能である。

ライティングでは、自分の意見を書く方法や論理立てて説得力のある書く方法などがあり、ビジネスの場でもEメールだけではなく、案内書や広告、説明書などにも関連している。単語力や文法知識だけではなく、それ以上の知識や技法が必要とする場合が多く、母語話者の思考を理解しておく必要性がある。エッセイ・ライティング(Es-

2019年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学助教授 言語学、外国語教育

say Writing) やアカデミック・ライティング (Academic Writing), テクニカル・ライティング (Technical Writing) などといった方法で英文を表現するのがライティング技能である。

スピーキングでは, ライティングと同様に, 自分の意見を話す方法や論理立てて説得力のある話す方法などがある。スピーチ (Speech) やディスカッション (Discussion), デベート (Debate) やプレゼンテーション (Presentation) などといった方法で英文を表現するのがスピーキング技能である。

3. 英語 2 能力

英語の 2 能力という場合, コンプリヘンション (Comprehension) ・ コミュニケーション (Communication) を指す。コンプリヘンションでは, 文字で理解する方法と音声で理解する方法がある。リーディングとリスニングが合わさったものがコンプリヘンション能力である。コミュニケーションでは, 文字で表現する方法と音声で表現する方法がある。ライティングとスピーキングが合わさったものがコミュニケーション能力である。

以上の 4 技能をどのようにして 2 能力へと結び付けるのが重要となる。端的に考えれば, 「文字で理解するリーディング」, 「音声で理解するリスニング」, 「文字で表現するライティング」, 「音声で表現するスピーキング」となる。有機的な解釈を基にすると, 理解・表現をベースにするか, 文字・音声をベースにするかで大別されると考えられる。前者であれば, 「文字と音声で理解し, 文字と音声で表現する」ということになる。換言すれば「読みながら聞き, 書きながら話す」ことである。一見すれば「文字・音声のコンプリヘンション」と「文字・音声のコミュニケーション」であるため, 学習の問題にはならないように感じられるかもしれないが, 「文字と音声の違い」が大きな障害となり得てしまう。つまり, 後者の「文字を理解・表現し, 音声を理解・表現する」方が合理的である。この「読みながら書き, 聞きながら話す」方が何故良いのかに注目しなくては

ならない。

特に, この「文字と音声の違い」を明記したものに, 「音声優位性仮説」 (Sound Superiority Hypothesis: SSH) (大山 2015, 2017) があり, 音声は文字よりも優越であるという理論的枠組みから, 目に見える文字とは違い, 目に見えない音声では文字以上の情報が存在していることを示唆している。「教育音声学」 (Pedagogical Phonetics) (Togo 1999) における「話し方を替えれば, 意味が替わる」ことから, 「文字の立場から見た音声の必要性」ではなく, 「音声の立場から見た文字の必要性」を提唱している。

4. 新たな英語 2 能力

「文字ベースの理解・表現」と「音声ベースの理解・表現」とを大別するには, 内容語 (Content Words) と機能語 (Function Words) を基にして考えるのが妥当である。前者は英文の意味を示す品詞の総称で, 名詞, 動詞, 形容詞, 副詞, 疑問詞, 間投詞, 否定詞などがある。後者は英語の構造を示す品詞の総称で, 代名詞, be 動詞, 助動詞, 冠詞, 前置詞, 接続詞などがある。

次の英文を例に挙げる。

(1) Tom is eating an apple on the bridge.

(1)の例文では, 内容語と機能語がそれぞれ 4 つある。計 8 語の文であれば, 7 つの切れ目の可能性が生じる。つまり, 単語と単語の間には, スペースが存在しているため, 本当に切るべき箇所であるのかそうではないのかが重要になる。

3 つの箇所に切れ目が必要となると以下のようになるのが多いのではないだろうか。

(2) Tom | is eating | an apple | on the bridge.

(2)では, be 動詞と動詞の進行形, 冠詞と名詞 (冠詞の後ろには名詞が必要), 前置詞と冠詞と名詞 (前置詞の後ろにも名詞が必要で, 冠詞と同一の名詞でも可能) というそれぞれの規則性から区切

りが考えられる。ここで内容語と機能語で比較すると、「内容語の後ろに区切りがある」という規則が生じる。この規則は文法的な文字ベースのものであり、リーディングとライティングで必要となる。リーディングでは、「後ろから読むのではなく、前から読む」に繋がり、その「前から読む」と「トムは」「食べている」「リンゴを」「橋で」の順に読んでゆく。ライティングでは、この区切られた単位で書き、情報量を増やしてゆく。

では、別の基準で規則を考えると、「機能語の後ろに区切りがある」、「内容語の前に区切りがある」、「機能語の前に区切りがある」が逆・裏・対偶の関係で説明することが出来るであろう。しかしながら、条件の余剰を避けるように最大公約数を検証すると以下が挙げられる。

(3) Tom is | eating an | apple on the | bridge.

(3)では、内容語と機能語で比較すると、「内容語の前に区切りがある」という規則が生じる。この規則は音法的な音声ベースのものであり、リスニングとスピーキングで必要となる。内容語が4つのため、4テンポで発音され、内容語の後ろに機能語が続くイメージである。内容語が強く発音され、機能語が弱く発音されることから、このような規則に慣れる必要がある。リスニングでは、内容語のみに注目し、Tom, eating, apple, bridgeのみ聞き、他の機能語が何であったのかを聞く必要はない。換言すれば、全てを文字化するとスピードに慣れることは不可能で、速い発話を聞くことは困難になってしまう。スピーキングでは、内容語を明白に話し、機能語は曖昧に話す。この曖昧に話すことは日本語に存在していないため、日本人学習者には困難である。しかしながら、学習初期段階では内容語をより強く明確に発音するように心掛けていれば、英語のリズム感を体得することは可能であると考えられる。

重要視しなくてはならないことは、「内容語の後ろに区切りがある」という規則と「内容語の前に区切りがある」という規則では、情報の重要性の位置が変わる点である。前者の単位であると、

内容語が後ろの方にあり、必要な情報は区切りの直前となる。一方、後者の単位であると、内容語が前の方にあり、必要な情報は区切りの直後となる。要するに、「読む・書く」と「聞く・話す」ことでは同じようにしてはならないということである。「読むようにして聞いてはならない」「書くようにして話してはならない」のである。中学校や高等学校において、英文法としての文法的な「文字ベースの理解・表現」を学習・指導する場合は、その対極となる英音法としての音法的な「音声ベースの理解・表現」も併せて学習・指導する必要性が考えられる。

この「内容語の前に区切りがある」という規則は、元々英語母語話者が持っている Metrical Segmentation Strategy (MSS) (Cutler and Norris 1988) が基本となり、英語のリズムの根幹を成している。MSSでは、内容語の前に区切りがないと区切りがあるものと判断し、機能語の前に区切りがあると区切りがないものと判断するというものである。よって、英語そのもの (Native-ness) を把握できる1つの要因になり得る。

5. 指導例

英語教育学的な自然性 (Naturalness) の視点から、Implicational Hierarchy (IH) (Jakobson 1941) と「有標性」(Markedness) (Eckman 1977) を基にするのが妥当である。前者は容易なものから困難なものへと習得する学習プロセスであり、後者は言語普遍的特徴を示す「無標」(Unmarkedness) から言語固有的特徴を示す「有標」へと習得する学習プロセスである。加えて、Feature Hypothesis (FH) (McAllister et al. 2002) で示されている言語習得の内容に関わる素性も存在している。これらを基にした指導プロセスと試案は表5-1の手順と考えられる。

「品詞」の把握をした後、実際の例文から「品詞分解」をし、「内容語」と「機能語」に大別する。その上で「内容語の後ろで区切りがある」リーディングとライティングか「内容語の前で区切りがある」リスニングとスピーキングかで切り

表 5-1 指導プロセスと試案

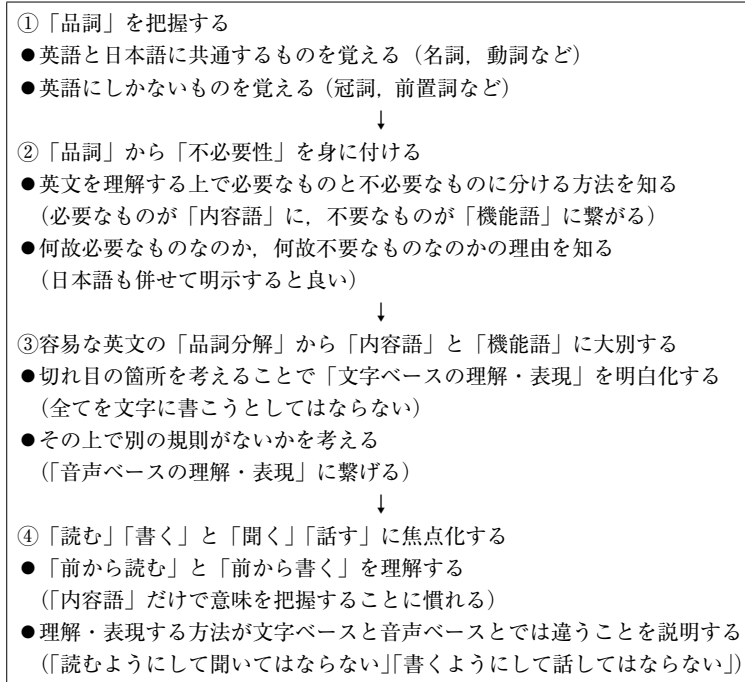
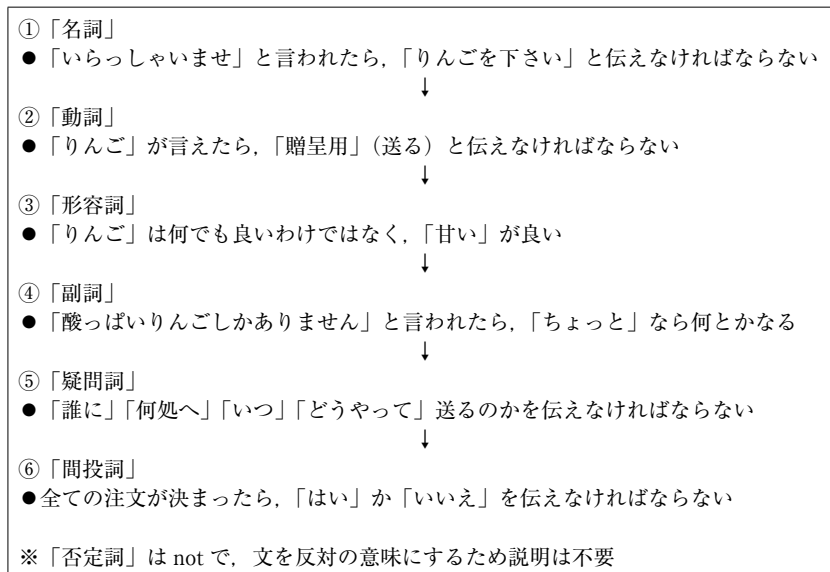


表 5-2 内容語を覚えるための試案



替えるプロセスとなる。特に、②の品詞の「必要性」は日本人には不慣れである。必要なものとなる「内容語」では、表 5-2 の八百屋を例に挙げ

ることが可能である。

一方、不要なものとなる「機能語」では、「なくても意味が変わらない」ことに焦点を当て、

表 5-3 機能語が不要なものである理由

①「be 動詞」
● Tom is a student. を想像した後, Tom a student. でも意味は変わらない
②「冠詞」
● Tom is a student. を想像した後, Tom is student. でも意味は変わらない
③「前置詞」
● There is a clock on the wall. を想像した後, There clock wall. でも壁に時計がある (壁自体が時計の場合は wall clock の語順)
④「代名詞」
● He is a student. が Tom is a student. でも意味は変わらない
⑤「助動詞」
● Tom can swim. が Tom swims. でも意味は変わらない (「泳ぐ」ことが出来るので「泳ぐ」)
● Tom will swim. が Tom swims. でも意味は変わらない (言って直ぐに「泳ぐ」が終わって, ずぶ濡れになるわけではない) ※ Tom swam. は Tom swims. とは意味が違う (「泳いだ」は今現在は「泳いでいない」ことになるため, 過去形は未来形と違う)
⑥「接続詞」
● When I came home, I slept soon. を想像した後, I came home. I slept soon. と 2 文にはなるが, 意味は変わらない (Coming home, I slept soon. のように分詞構文でも「接続詞」は不要)

「内容語」がなくなると意味が変わってしまうことに気付かせるのが良い。表 5-3 がその理由になり得る。異論などが生じるかもしれないが、4 技能を 2 能力へと引き上げるためには必要な解釈であると考えられるのではないだろうか。

6. 結 論

英語 4 技能から英語 2 能力へと統合的な学習・指導を実施するための英語コミュニケーションの意義を提唱してきた。加えて、この 2 能力は「コンプリヘンション能力」と「コミュニケーション能力」ではなく、新たな 2 能力として「文字ベースの理解・表現」と「音声ベースの理解・表現」が的確であり、「内容語の後ろで区切りがある」と「内容語の前で区切りがある」との大別から理由付けとした。MSS という音声学・音韻論 (Phonetics and Phonology) では「母語習得論」(First Language Acquisition) の 1 つの枠組みではあるが、Nativity を習得することが学習者には大切であろう。特に母語話者は学習者と違っ

て「何故そうなるのか？」という問い掛けに答えられない場合が多い。言語学という母語話者の直感性は意味論 (Semantics), 特に語彙意味論 (Lexical Semantics) での意味論的直観 (Semantic Intuition) で扱われることがあるが、「内容語」と「機能語」を基にした切り方を用いることで音声学・音韻論で扱うことも可能である。

「国際化」を目指すためには、SSH を考慮しつつ、教職科目での意義 (大山 2018), 必修科目での意義 (大山 2019), 本研究の教養英語での意義, など多角的な検討をし, 共存してゆく必要がある。本研究の方法が今後の英語教育学への寄与に貢献できると考えられる。

参考文献

- Cutler, A. and Norris, D. G. (1988). The role of strong syllables in segmentation for lexical access. *Journal of Experimental Psychology*, 14, 113-121.
- Eckman, F. R. (1977). Markedness and the contrastive analysis hypothesis. *Language Learning*, 27, 2, 315-330.
- Jakobson, R. (1941). *Child Language Aphasia and*

- Phonological Universals*. The Hague: Mouton.
- McAllister, R., Flege, J. E. and Piske, T. (2002). The influence of L1 on the acquisition of Swedish quantity by native speakers of Spanish, English and Estonian. *Journal of Phonetics*, 30, 229-258.
- 大山健一. (2015). 「接続」の三項目比較研究. 『創設30周年記念フォーラム』, 大東文化大学語学教育研究所, 30, 185-197.
- 大山健一. (2017). 現代版「接続」の言語学的・教育的意義. 『英文学思潮』, 青山学院大学英文学会, 90, 73-79.
- 大山健一. (2018). 英語科教育法における英語学の意義. 『江戸川大学紀要』, 28, 45-49.
- 大山健一. (2019). 「国際化」を目指すための必修科目の意義. 『江戸川大学紀要』, 29, 227-231.
- Togo, K. (1999). *A Study of Pedagogical Phonetics*. Tokyo: Otowashobo-Tsurumishoten.

Significance of Communicative English for “Internationalization”:

English Education Consideration to the Renewed Integrated Learning
and Teaching from Four Skills through Two Abilities

Kenichi OHYAMA

Abstract

This paper proposes how the renewed integrated learning and teaching of English are necessary for the target as internationalization. According to the study of education improvement in Japan, to acquire English basic skills is significant at a university. The remedial aspects, however, tend to focus only on each skill. This is mostly because teachers carry out English classes based on their own technical researches. Additionally, even if such researches are linked with four skills, they can not be related to two abilities. For English educational demands, the teachers should know how they utilize pedagogical approach to two abilities from four skills based on the native speakers' intuition. According to this approach, whether teachers major in literature or linguistics is independent; moreover, such technical researches are not necessary to learn and teach. The pedagogical approach can be a sort of references to curriculum development for both methods in teaching English and teacher training.

Keywords: Communicative English, English Four Skills, English Two Abilities, Remedial Education, English Education